

看護学生間で協同学習を行った実践報告 第2報

～学生の自由記載から得た学びの構成要素～

○百々 直子 江崎 智子 関西看護専門学校

キーワード：協同学習 教科外活動 看護学生 学生間の連携

【はじめに】看護学生間の協同学習を教科外活動として実施し、協同学習の効果を問うアンケートによる第1報の研究を行った。その結果、互いに学び合う環境で役割と責任を持ち、仲間と取り組むことで学習への関心と理解を深めていた。このように協同学習がもたらす効果については明らかになったが、協同学習によって学生自身が何を学びと感じたのかの研究はほとんどない。そこで、アンケートの自由記載から学生が何を学びとしたかを分析することで協同学習を推進する一助になると考えた。【目的】第1報で行ったアンケートの自由記載から、学生が感じた協同学習の学びの構成要素を明らかにする。【方法】①デザイン：質的記述的研究②対象：A看護専門学校の2年生98名③アンケート実施時期：2017年4～11月の解剖生理グループワーク（以後GWとする）後④収集方法：自記式質問紙を作成し一斉配布後、自由提出⑤分析方法：自由記述の文脈から意味内容をコード化し、次に内容の類似性・同質性に基づきカテゴリー化した。【倫理的配慮】本研究が所属する施設の倫理委員会において承認を得た。アンケートの回答は自由意思であり、結果は調査以外の目

的で使用しないことを説明し、提出をもって同意を得たものとした。【結果】回収率96%。抽出したコードの総数は155で、そこから25のサブカテゴリー、6つのカテゴリー〈協同学習による知見の広がり〉〈発表による気づき〉〈気持ちの変化：マイナスからプラスへ〉〈充実感：他者から刺激を受け育んだ思い〉〈仲間との交流：他者に対して芽生えた思い〉〈役割遂行感〉が抽出された。一つ学びの阻害因子として、学習者間での時間や場所の調整・連携不足があった。

【考察】学生は、GWの取り組みによって色々な考え方や価値観に気づくと共に、異なる意見に触れることで学びを深めていたと考える。また、マイナスの感情がGWの成功体験により変化し、自己の成長を感じ自信に繋がっていた。そして、自分ばかりでなく仲間のためという思いは、学習という社会的な営みの中で芽生え、自分の満足だけでなく他者を思いやる気持ちを育む効果があった。更に、学生間での調整・連携を支援することにより、協同学習の効果が高まると考えた。【結論】学生は、自己と他者を見つめ共に変化成長していることが、協同学習の学びと感じていることが明らかになった。